

聖書日課 『からし種』 2022.7.31－8.7

<p>7月31日 (日)  創世記 7章</p>	<p>「ノアは、すべて主が命じられたとおりにした」(5節)。ノアは「地上に人の悪が増し、常に悪いことばかりを思いはかる姿に心を痛めた神」(6:5 以下)が命じられた言葉をどう聴いたのだろう。その神が今の世界をご覧になる時、ノアの時以上に心痛めておられるのではないか。今の私たちにとって「すべて主の命じられたとおりにする」とはどういうことだろうか。</p>
<p>8月1日 (月)  創世記 8章</p>	<p>「見よ、鳩はくちばしにオリーブの葉をくわえていた。ノアは地上から水がひいたことを知った」(11節)。新礼拝堂のステンドグラスの鳩もオリーブの葉をくわえていて、聖霊のしずくが世界中に平和を告げ知らせていく。朝陽が透ると礼拝堂の白い壁にステンドグラスの青がきれいに映し出されるように、イエス・キリストを通して映し出される平和の光を受けていこう。</p>
<p>2日 (火)  創世記 9章</p>	<p>「人の血を流す者は／人によって自分の血を流される。人は神にかたどって造られたからだ」(6節)。エジプト王のような高貴な存在のみが「神」と称えられた時代に、聖書は「人間一人ひとりが神にかたどり造られた大切な存在である」と告白した。民族、身分、性別で区別されることなく、一人ひとりの「神のかたち」としての尊厳は決して傷つけられてはならない。</p>
<p>3日 (水)  創世記 10章</p>	<p>「ノアの息子、セム、ハム、ヤフェトの系図は次のとおりである。洪水の後、彼らに息子が生まれた」(1節)。ノアは「神と共に歩む、無垢な人」(6:9)だったが、その「無垢な信仰」が子孫を救うわけではない。人間を救うのは「神の慈しみ」であり、その「神の慈しみ」につながり歩む「信仰」は、各人自らが歩みの中で神に願い求めていくものであることを覚えたい。</p>

<p>4日 (木)  創世記 11章</p>	<p>「彼らは、『さあ、天まで届く塔のある町を建て、有名になろう。そして、全地に散らされることのないようにしよう』と言った」(4節)。バビロン帝国は征服民たちに「一つの言語」を強制し建築労働に駆り立てていった。他者を支配する力を得た時、人間は神の慈しみを忘れ、他者の尊厳を奪うことに鈍感になってしまう。今日、他者の言葉を大切に聴く者とされて。</p>
<p>5日 (金)  創世記 12章</p>	<p>「アブラムは、主の言葉に従って旅立った」(4節)。私たちは終着地が気になる。「主は私たちをどこに連れていかれるのか？」と。しかしアブラムは終着地を知らずに「主の言葉に従って旅立った」。彼は「どこに行くのか？」よりも、「誰と一緒に行くのか？」を重視したから。「見えるもの」を求めがちな私に、今日「見えないものを信じる信仰」を与えてください。</p>
<p>6日 (土)  創世記 13章</p>	<p>「アブラムは天幕を移し、ヘブロンにあるマムレの木のところに来て住み、そこに主のために祭壇を築いた」(18節)。アブラムは行く先々で主を礼拝し、主のための祭壇を築いた。私たちは日々の歩みの中で、主を礼拝する祭壇を築いているだろうか。一日の終わりに、どんな小さな恵みも主から与えられた恵みとして心に刻み、礼拝をささげることができるように。</p>
<p>7日 (日)  創世記 14章</p>	<p>「あなたの物は、たとえ糸一筋、靴ひも一本でも、決していただきません。『アブラムを裕福にしたのは、このわたしだ』と…言われたくありません」(23節)。アブラムの信仰は、主なる神が、自分生かしてくれているという確信につながっているのだろう。人の世界で富を積むことだけでなく神の国に富みを積むことを大切にす信仰をたしたちもいただきたい。</p>